子ども観の形成に関する研究

—専門教育を受けることで子どもイメージはどう変化するか—

菅 眞佐子

(滋賀大学教育学部)

【目的】

保育者が持つ子ども観は、その保育行動にさまざまなレベルで影響していると考えられる。子ども観は、また、その内容により子どもの受容され方が異なるなど、親、社会人といった大人一般の子どもに対する行動も規定していると考えられ、子ども観がどのように形成されるか、その過程に経験や教育が如何に関わっているのか、を明らかにすることは、保育者養成のみならず子育て支援一般の見地からも重要な課題である。本研究では、大学1年生から4年生までの間に、幼児教育を専門とするコースと他コースの学生の子ども観がどのように変化するか、3歳児、5歳児それぞれについて学生の持つ「子どもイメージ」を明らかにすることを通じて検討する。

【方法】

被験者 滋賀大学教育学部に在籍する幼児教育コースの学生1年生44人、4年生42人、他コースの学生1年生40人、4年生40人、合計166人。

手続き 深谷ら(1972)、深谷(1973)が用いた77の形容詞対について「あなたが持っている幼児のイメージについて、もっともよくあてはまるところにマルをつけて下さい」と7段階評定を求めた。77の形容詞対の半数についてはポジティブな形容詞の提示位置が左右逆にされた。調査は、3歳児についてイメージを問うものと5歳児について問うものの2回が行われ、1回目と2回目の間には最低1週間の間隔が置かれた。どちらの年齢について先に評定するかは被験者の約半数について逆にした。また、調査の最後に、当該年齢の幼児について被験者が「どの程度はっきりイメージできたか」について7段階で評定を求めた。調査の時期は1年生は入学直後の4月から5月の間、4年生については第4年次の5月から11月の間であった。

【結果と考察】

1. 3歳児について

1) 因子の抽出と解釈

全被験者のデータに基づいて主成分分析を行ったところ、固有値の変化は、第1因子より順に9.63、7.07、5.03、3.36、2.66、2.21、1.96……となり、5因子の抽出が適切であると判断された。そこで主因子法により

5因子を抽出し、バリマックス回転を行ったところ、分散の説明率は第1因子より、8.5、8.1、7.1、4.3、3.8となり、累積で31.7%となった。

因子負荷量の高い形容詞対をみると、**第1因子**については、かわいらしい—にくたらしい、好かれる—嫌われる、などの負荷が高く「かわいらしさ因子」と解釈される。**第2因子**は、いたづらな—おとなしい、意欲的な—無気力な、などの負荷が高く意欲的な活動の高さに関する「活動性因子」と解釈される。**第3因子**は、無責任な—責任感のある* (以下「*」印は調査時には左右が逆に呈示された対を示す)、わからずやの—ききわけのよい、などの負荷が高く、自立的に行動を統制できることに関わる「自立性因子」と考えられる。**第4因子**は、鋭い—鈍い、敏感な—鈍感な、などで負荷が高く、繊細で敏感な様子を表す「鋭感性因子」、**第5因子**は、こせこせした—おっとりした*、せっかちな—のんびりした、の負荷が高く子どもの活動テンポの速さに関わる「せっかちさ因子」と解釈される。

2) コース、学年間の比較

因子得点について所属コース、学年による2要因分散分析を行ったところ、**第1因子**では、コースの主効果($F(1,162)=4.1, p<.05$)、学年の主効果($F(1,162)=4.74, p<.05$)が有意であった。因子得点から見て、3歳児の第1因子が表す「かわいらしさ」について、1年生から4年生になるまでの間にそう感じる程度が相対的に低下すること、しかし、幼児教育コースの学生は他コースの学生より「かわいらしさ」をより高く感じていることがわかる。**第2因子**では、コースと学年の交互作用が有意であった($F(1,162)=7.82, p<.01$)。学年ごとにコース間で因子得点の平均値を比較したところ、1年生のみにおいてコース間に有意差がみられた($t=2.54, df=82, p<.05$)。第2因子が表す「活動性」について、1年生時には幼児教育コースの学生の方がより高く感じているが、4年生時には、幼児教育コースでは相対的に低下し他コースでは相対的に上昇することで、コースによる感じ方の差がなくなることが示された。**第3因子**については、学年の主効果のみが有意であった($F(1,162)=8.64, p<.01$)。負荷の高い形容詞対の極性から判断して、3歳児の「自立性」の側面に

については、1年生時よりも4年生になったときの方が、相対的に高いと感じていることが示された。**第4因子**では、コースによる主効果 ($F(1,162)=14.31, P<.001$)、学年による主効果 ($F(1,162)=6.90, P<.01$) が有意であった。3歳児の「鋭敏性」に関しては、幼児教育コースの方が他コースより高く、また、4年生が1年生より高く感じていることが示された。**第5因子**については学年の主効果のみが有意であった ($F(1,162)=4.65, P<.05$)。「せっかちさ」については、4年生の方が1年生より低く感じているといえる。

2. 5歳児について

1) 因子の抽出と解釈

全被験者のデータに基づいて主成分分析を行ったところ、固有値の変化は、第1因子より順に、19.33、10.95、4.48、2.44、2.09、1.97、1.80……となり、5因子の抽出が適切であると判断された。そこで主因子法により5因子を抽出し、バリマックス回転を行ったところ、分散の説明率は第1因子より、15.0、14.4、4.6、2.8、2.5となり、累積で39.3%となった。

因子負荷量の高い形容詞対を見ると、**第1因子**については、たよらないーたのもしい*、頭の悪いー頭の良い、などの負荷が高く、おちついて自分の力で要領よく課題に取り組む「問題解決能力因子」と解釈される。**第2因子**は、楽しそうなーつまらなそうな*、生き生きしたー元気がない*、などの負荷が高く、生き生きした活動性の高さに関する「活動性因子」と考えられる。**第3因子**は、生意気なーかわいい気のある、しつこいーさっぱりした、などの負荷が高く「扱いにくさ因子」と考えられる。**第4因子**は、こせこせしたーおっとりした*、すばしこいーのろのろした、の負荷が相対的に高く、子どもの活動テンポの速さに関わる「すばしこさ因子」と考えられる。**第5因子**は繊細なーおおまかな*、鋭いー鈍いの負荷が相対的に高く繊細さと鋭さの合わさった「鋭敏性」の因子と解釈できる。

2) コース、学年間の比較

因子得点について学生の所属コース、学年による2要因分散分析を行ったところ、**第1因子**では、コースの主効果 ($F(1,162)=89.21, p<.001$)、学年の主効果 ($F(1,162)=32.88, p<.001$)、コースと学年の交互作用 ($F(1,162)=20.18, p<.001$) がそれぞれ有意であった。因子得点と形容詞対の極性から判断して、5歳児について最も大きな説明率を持つ「問題解決能力」という側面については、幼児教育コースの学生の方が他コースの学生よりも、より高いというイメージを持っており、

4年生の方が1年生より、より高いというイメージを持っていることがわかる。また、交互作用が有意であったことから、1年生から4年生になる間に「問題解決能力」がより高く評価されるようになる変化の程度が、他コースより幼児教育コースにおいて大きいことが示されている。**第2因子**については、コースの主効果 ($F(1,162)=4.92, P<.05$)、コースと学年の交互作用 ($F(1,162)=4.80, P<.05$) が有意であった。この因子が表す「活動性の高さ」の側面については、幼児教育コースの学生の方が他コースの学生よりも高く感じているが、4年生までの変化の程度は幼児教育コースの学生の方が相対的に大きく、しかもその変化の方向は「より活動性が低い」方へシフトしていることが示された。

第3因子、第4因子、第5因子についてはコース、学年に関して、主効果、交互作用のいずれも有意でなかった。このことから、5歳児についての「扱いにくさ(第3因子)」、「すばしこさ(第4因子)」、「鋭敏さ(第5因子)」の側面については、入学時から4年生時まで学生のイメージは大きく変わらず、また、コースによってもそのとらえ方に大きな差はないことがわかる。

3. イメージし易さについて

得られた評定値について、コース、学年、対象年齢(3歳・5歳)について3要因の分散分析を行ったところ、コースによる主効果 ($F(1,159)=16.59, P<.001$)、学年による主効果 ($F(1,159)=4.24, p<.05$)、ならびに、学年と対象年齢の交互作用が有意であった ($F(1,159)=4.28, p<.05$)。評定対象となった子どもについて、幼児教育コースの方がよりイメージし易く、また、4年生の方が1年生よりイメージし易いと感じていることが示されている。さらに、学年と対象年齢の交互作用が有意であったことから、4年生の方が1年生よりイメージしやすと感じている程度の差が、3歳児より5歳児の方で大きいことが示された。なお、ここでは欠損値が含まれる3人分のデータは除いて分析した。

まとめ

以上から、①大学生が持つ幼児イメージは、3歳児と5歳児で、第1因子、第3因子の内容に相違が見られるが、他の因子については性格が類似している、②4年生の方が、また、幼児教育コースの方が3歳児の「かわいらしさ」・「鋭敏性」、5歳児の「問題解決能力」などについてよりポジティブにとらえている、③幼児教育コースの学年進行による変化は、a) 5歳児の「問題解決能力」の評価が他コースより大きく上昇している、b) 3歳児、5歳児ともに「活動性」の評価が4年生で低くなる、などの点に見られた。